2022年度 小・中学生

「いのち」の作文コンクール

作品集

さくひんしゅう

©Moe Nagata

公益財団法人 JR-West Relief Foundation
JR西日本あんしん社会財団

JR西日本あんしん社会財団 2022年度小・中学生「いのち」の作文コンクール 作品集

公益財団法人 JR-West Relief Foundation
JR西日本あんしん社会財団

ごあいさつ

公益財団法人　ＪＲ西日本あんしん社会財団
理事長　来島 達夫

当財団は２００５年にＪＲ西日本が惹き起こした福知山線列車事故の反省から設立され、「いのち」や「こころ」、「安全」をテーマに様々な活動を行っております。

本コンクールは、作文を通じて「いのち」の大切さを考えていただくとともに、それにより「いのち」を大切にする安全で安心できる社会につなげていきたい、という思いを込め、将来を担う小・中学生の皆さんを対象に募集しており、今回で4回目を迎え、5千余の応募をいただきました。

今回は身近な「いのち」のはじまりや終わりに触れた作品に加え、世の中の情勢を反映し、戦争や紛争に触れつつ、それをきっかけに「いのち」を見つめる作品や、様々な辛い経験をしつつも、前を向いて生きようとの思いに至ったことなど、「生きる」ことへ真剣に向き合う様が描かれた作品などが数多く寄せられました。皆さんのいのちの尊さや生きることへの想いが表現されており、主催者として大変嬉しく思います。

コンクールの実施にあたり、ご指導いただきました学校関係者の皆様、並びにご家族の皆様ほか、多くの方々からのご協力を賜りましたこと、厚く御礼申し上げます。

本作品集への掲載は、ご応募いただいた作品の一部ですが、小・中学生のみなさんはもちろん、多くの方に「いのち」について考えるきっかけにしていただければ幸いです。

目次

CONTENTS

●いのちの作文大賞（4名）…… 4
●優秀賞・選考委員長賞（6名）…… 22
●優秀賞（20名）…… 34
●入選（70名）…… 62

●選考を終えて…… 68

いのちの作文大賞（小学生　一・二年生）

「くりかえすアサガオのいのち」

大津市立下阪本小学校　二年C組　紺野　隆之介

　一年生のとき、学校で一人一こずつプランターでアサガオを育てることになった。ペットボトルのジョーロを作り毎日水をあげた。夏休みになったら自分のアサガオを家にもってかえってかんさつすることになっていた。でも夏休みちょくぜんかぜをひき三日間学校を休んだ。その間にアサガオはかれてしまった。夏休みのしゅくだいのアサガオのかんさつプリントに一つも色がぬれなくなってしまった。ぼくはしょんぼりした。

　でも夏休みしょ日にむらさきのきれいなアサガオが一つさいた。すっかりあきらめていたのに。すごくうれしくてさい高の気分だった。ぼくはかんさつプリントに一つ色をぬった。

　その日から毎日アサガオがさいた。一つ二つ三つ四つ。プリントには一日八つまでしかぬれないのに、それい上さいた日もあった。一どかれたように思えたアサガオがこんなにさくなんて。毎朝アサガオを見るたび元気がでた。八月の終わりに近づくと、アサガオはかれはじめて、たねをつけはじめた。さよならのときだ。アサガオのかれたつるをずこうの工作につかった。

　今年の六月くらい、去年アサガオのプランターをおいていたじめんにかわったくさが生えていることにきづいた。「ざっそうかな?」とはじめは思った。しばらく育っていくのを見まもっていたらはっぱの形が去年育てていたアサガオによくにている。「まさか?」と思いながらも毎朝水をあげることにした。ぐんぐん育った。おじいちゃんがしちゅうをたててくれた。しちゅうに、ぐるぐるとツルがまきつく。夏休みになって二日目むらさきのアサガオ

いのちの作文大賞（小学生　一・二年生）

がさいていた。びっくりした。まさか今年もまたアサガオにあえるなんて。

アサガオの生命力のつよさにぼくは二年れんぞくでおどろかされた。こうなってくると来年の夏にもアサガオにあいたくなってくる。よし、このばしょをアサガオゾーンにしよう。

講　評

枯れたとあきらめていたのに、学校の観察プリントに色が塗りきれないほどに花を咲かせた昨年のアサガオ。そのプランターの下から、また今年もアサガオが発芽して再び紫の花が咲く、という繰り返すいのちに2年連続驚かされる。思わず出たこの場所を「アサガオゾーン」にしようとの一言からも、生命の尊さが素直に表現できている。2年間の期間を経て、アサガオに対する素直な想いを綴った小学生らしさあふれる作文である。

いのちの作文大賞

（小学生　三・四年生）

「たま子が教えてくれたこと」

神戸市立竹の台小学校　四年一組　空閑　晴彦

去年の夏、ぼくには一緒にすごした友だちがいた。その子はとてもきれいできらきらしていて、とっても食いしんぼうだった。毎日遊んだ友だち、その子の名前はたま子。ヤマトタマムシの女の子だ。

たま子と出会ったのは八月八日のことだった。公園に行こうと外に出たら、すぐ前の道路に、たま子がペタリとすわりこんでいた。本物のタマムシを初めて見たぼくは、うれしくて大急ぎで走ってかけより、そっとたま子をつかまえた。たま子はにげようとしなかった。ぼくは帰るとすぐに図鑑でタマムシの事を調べた。すると、タマムシはとてもせんさいで、よく拒食症になってしまうと書いてあってぼくはびっくりした。拒食症だなんて、まるで人間みたいだ。だから毎日ぼくはエノキの葉を取りに行った。たま子はエノキ以外の葉は食べなかったし、エノキが少しでも枯れていたり、よごれていると食べない。だから毎日活き活きとした濃い緑の葉をぼくは探さなければならなかった。大変だったけど、おいしそうにシャクシャクと食べるたま子を見ていると、ぼくは幸せだった。

秋になるとたま子は弱っていった。そして十月九日、とうとう死んでしまった。たま子とぼくは六十三日を一緒にすごした。たま子はふつうのタマムシの三倍も長く生きてくれた。ぼくは大声でわぁわぁ泣いた。毎日ごはんをあげて大切に大切に育てた分、別れがこんなに悲しいんだと思った。そして泣きながら気付いた。ぼくに毎日ごはんを作って育ててくれているお父さんやお母さんも、もしぼくがいなくなったら、こんな風に悲しくて苦しい思いを

いのちの作文大賞（小学生　三・四年生）

するんだと。だからぼくは自分の命も大切にしなくちゃならないんだと。どの命もだれの命も、大切にしている家族がいる。だからみんなも大切にしなくてはならない。そんな大事なことをたま子が最後にぼくに教えてくれた。そう思ってぼくはまた大きな声で泣いた。

講　評

公園で捕まえたタマムシを、餌に気をつかいながらも懸命に飼育。通常の3倍生きてくれたタマムシの「たま子」と過ごした日々を通じ、いのちの大切さを教えられたことを綴る。書き出しの、誰か友達にでも話すかのような、正体をなかなか明かさない少しもったいぶらせた表現の仕方に、作者の楽しそうに書いている様子が感じられる。また「座り込んでいた」「女の子」などの言葉の使い方に、たま子への愛おしみがたっぷりと表現されている。

いのちの作文大賞

（小学生　五・六年生）

「命のおすそわけ」

姫路市立手柄小学校　五年三組　鈴鹿　巧

五月、学校の校門に植えられているパンジーやビオラの花畑に黒と赤のいかついトゲトゲした子がわがもの顔でうごめいている。

ツマグロヒョウモンというタテハチョウ科のチョウの幼虫だ。毒々しい姿ではあるが、性格は穏やかで、そのとげはやわらかく、毒もなく、刺すこともない。僕の大好きな蝶だが食欲がすごくて、一匹いたらパンジーは、丸裸にされてしまう。そのためきらわれる。

四月、新学期には満開のパンジーには、この幼虫たちがたくさんいて、先徒たちが

「先生、毛虫がいっぱいいるよ！こわい！」

と訴えて、あわてて先生たちが駆除に走るので僕は気が気でない。今年は気候が寒く、出はじめたのは花がしおれてしまった五月も半ばだったので、注目されず安心していた。

でもパンジーは花がしおれると、すぐ次の花に植えかえられてしまう。どうせ捨てるならそれまで幼虫たちにたくさん葉っぱを食べてもらって、大きくなって、立派に羽化してほしいと思った。そこで僕は毎日のように幼虫をできるだけ目につかないパンジーの鉢に移してみんなの目から隠すようにした。

野生の蝶の羽化は1％程度だ。それは気候の影響だったり、天敵の鳥や人間によって駆除されたり、寄生虫のえじきとなるからだ。そんな中、奇跡的に蝶になれたものたちは、花の間を飛んで受粉を助けていってくれている。みんな命をつなぐ大切な役割を任うのだ。

ある日、パンジーの鉢と葉っぱは、蛹のたくさんついた茎ごと、根こそぎ掘り返され、鉢

の縁の蛹も全て取り外して捨てられて、土だけになっていた。そしてその数日後には別の花が植えられた。僕はがっくりした。

僕の住む姫路市でジャコウアゲハは市の蝶なので手厚く保護され、あちこちに食草であるウマノスズクサが育成されている。幼虫も成虫を捕ることも禁止されている。けれど他の蝶は基本害虫扱いだ。モンシロチョウはキャベツ、アゲハチョウはみかん、ツマグロヒョウモンはパンジー、花や野菜を育てたり、大切にしている側の人たちからすると、蝶の幼虫たちは憎い敵だと思う。楽しみにしていた花を枯らし、食物をだめにするやつをどうしてわざわざ育てるようなことをしたいと思うだろうか。

でも、見ごろを過ぎた花、作物を収穫し終わったあと、葉っぱをどうせ捨ててしまうならば、蝶が巣立つまでのほんの少しの間、新しい命におすそわけをしてあげてほしい。

害だけじゃない。彼らは、蝶になれば花の受粉を助け、命を、実を育ててくれている。だから幼虫たちが蝶になり飛び立つまでの食糧として、隠れ家として、ほんの少しの期間分け与えて、命をつながせてあげてほしい。

それが「自然と共に生きることわり」ではないのか。蝶の舞う町はきっと、人の心も、自然も豊かにしてくれる命のかけはしとなれると思う。

講評

ツマグロヒョウモンが好きだが、パンジーを食べてしまうため学校では嫌われる。ただ、見頃を過ぎた花についた幼虫ならば、その花は植え替えて捨ててしまうのだから、せめて駆除せずそのまま食べさせ、羽化させてほしいと願う。ツマグロヒョウモンに対する現在の社会での扱いに対する反発心がしっかりと書けている。その上、成虫の蝶は受粉もこなし、いのちをつなぐ大切な役割を担うとし、主張もぶれずに表現されている。

いのちの作文大賞（中学生）

「いのちの証」

彦根市立中央中学校　三年　中井　柚姫菜

8月15日は終戦記念日です。テレビでは、戦後77年たったと報じています。私にとってはとてつもなく昔の話ですが、戦争によって310万人もの人が命を落としていったのです。以前は、このようなニュースを聞いても特別何かを感じることもなく「ふーん。そうなんだ。」と思うだけでした。しかし、修学旅行で広島に行ったことを思い出し、原爆ドームなど大変悲惨な現実があったことを目の当たりにしてきた今は、それらを深く理解し大切ないのちが失われていったこと、また、同じことをくり返さないことを再度心に刻みました。他国では、今だに戦争がくり返されています。失われる命は戦争だけでなく、事故、殺人、自殺、虐待、病気などさまざまなニュースがメディアで流れている毎日です。これらの失われる「いのち」のことを思う時、私には一生忘れられない「いのち」があったことを思い出さずにはいられません。

母は私が小学6年生の時にこの世を去りました。母の「いのち」を思う時、それは母が生きた証のことであると思えるのです。今一度私が知る母のいのちの証をたどってみたいと思い、この作文を書くことを決めました。

母は40年という灯りのろうそくを持って生まれてきました。母の幼い頃のことはそんなにたくさん知らないけれど、写真で見る小学生の母は私とそっくりで、自分がタイムスリップしたのかと思ったことがあります。母は私と妹に「いのち」をくれました。私は12年余り母と共に生き、いのちの証という思い出を作ってきました。この頃、母のいのちの灯りが消え

るなど思いもしませんでした。

そして、それは私が小学3年生の時に突然やってきました。母が病気で入院して手術を受けなければならなくなったのです。私も毎日の生活が全く変わってしまうことに従うしかありませんでした。誰よりも大好きな母のいのちのため、家族全員で一生懸命に尽くしました。治療によって、薬の副作用で見ていられないような日々もありました。しかし、母が懸命に戦っている姿は一生忘れることはありません。そして、どんな時もいつもの自分でありたいと努力していました。悲しくてつらくて、くやしくて多くの思いが母にはあったと思います。大声を出して泣きたい時もあったでしょう。「なぜ?」と恨みたい時もあったでしょう。でも、母は私たちの前では決して弱みを見せることはありませんでした。いつも前向きに生きていました。必死の思いで生きていました。

やがて、3年半がたった頃、最後の入院時に母はどうしても家に帰ることを希望しました。訪問診療、訪問看護、福祉用具などが大急ぎで整えられ、母の望みはかなえられました。最後の一週間の始まりでした。点滴、酸素の管をつけて我が家で私たちと同じ部屋で眠り、私たちを見続けて過ごしました。私たちを残していくことの不安や悲しみは、どんなに大きかっただろう。その当時は、それらを察することはまだ出来ませんでした。しかし、今、母のいのちを思う時、はかり知れない母の思いが胸いっぱいにこみあげてきます。

そしてとうとう、まだ雪が舞う季節に静かに母のいのちのろうそくは消えていきました。母は、私の卒業式や入学式の時にと手紙を残してくれました。突然祖母から渡された手紙は、涙でなかなか読むことができませんでした。最後につづられた「ゆきちゃん、大大大好きだ

いのちの作文大賞（中学生）

よ。」の言葉に涙があふれ出しました。私は今回母の「いのちの証」を追い、改めて母を思い出し、いのちについて考えることができました。

母のように、いつでも笑顔で前向きな自分でいられるようになりたいです。

「大大大好きだよ。ママ。」

講　評

小6の時の母の死。戦争や事件で命がないがしろにされる現状をきっかけに、母を改めて想う作品。戦争という普遍的なものから、母のいのちという自らのかけがえのない唯一の存在へと進めていった展開に拍手を送りたい。これからいのちを考えるうえで、同世代のお手本になるような構成である。母の思い出の中に浸りながら、「大大大好きだよ、ママ」という、3年半の時を経た今だから言える最後の表現も強く印象に残る作品である。

優秀賞・選考委員長賞

「ぼくのマイブーム」

私立同志社国際学院初等部　一年一組　加納　陸

ぼくのさいきんのマイブームは、たべたあとのやさいやくだもののたねをうえたり、そとにあそびにいったときにひろったたねをうえたりして、どんなめがでるかかんさつすることです。いま、ぼくのいえのにわには、いろんなしょくぶつのめがぴょこぴょこはえています。

ぼくは、かってきたたねじゃなくても、いえにあるたべおわったあとのたねからもめがでるのかな?とおもって、おかあさんのすきなパパイヤのたねをキッチンでもらってうえてみました。まいにち、

「めよでろー、めよでろー」

とおいのりしていると一しゅうかんくらいしてあさがおみたいなはっぱのめがでました。めがでるとおもっていなかったから、びっくりしました。パパイヤのみがなったらきっとおかあさんがおおよろこびするとおもって、いまもだいじにそだてています。

どのしょくぶつも、れいぞうこでひやされたり、すこしきずがあったり、つちのうえでからからになっていたりするのに、うえてみると、だいたいちゃんとめがでます。

ぼくは、いろんなめをかんさつするたびに、

「しょくぶつのいのちってつよいな。」

とおもいます。しょくぶつはぼくみたいにほねやきんにくはないけど、たいふうがきてもまけないし、ほんとうにつよいです。

いまは、ピーマン、ぶどう、ものたねをうえて、まいにち、

「めよでろー、めよでろー」

とおいのりをしているところです。

どんなめがでるのか、そうぞうしながらみずやりをするのがたのしいです。あたらしいいのちをまもってあげられるように、これからもおせわをがんばります。

講　評

食べ終えた野菜や色々な植物の種を植え、発芽させることに楽しみを見出しつつ、植物のいのちの力強さを感じる好奇心あふれる作品。「めよでろー、めよでろー」と祈りながら水やりをしている情景が思い浮かぶ。また、少しきずがあっても、からからになっていても植えてみるとだいたい芽がでる、などといった観察する力もすばらしい。タイトルの付け方も非常によく、選考委員の心をしっかりとつかんだ作品である。

優秀賞・選考委員長賞

「カタッポの命」

私立智辯学園和歌山小学校　三年二組　延與　晟一良

カタッポは、ぼくがはじめて金魚すくいですくった金魚です。金魚すくいのおじさんが、「体が小さいのをねらうんだよ。」と言ったので、ぼくは体が一番小さかったカタッポをねらいました。カタッポをおわんに入れた時、ぼくはとび上がるくらいうれしかったです。おじさんがおまけで五ひきくれたので、ぼくは六ぴきの金魚を家でかうことに決めました。

ある日ぼくは、カタッポの目玉が銀色に光った気がして、見たら、目玉が片方なくなっていました。うろこもはがれ、ぼくはすぐに目玉を食べたのはあの金魚だなと思いました。片目になったカタッポは、水そうのすみで一人でポンプのあわをつついているばかりでした。他の金魚が近づくと、さけるみたいに、すーっとどこかににげていってしまいます。

カタッポは、べつの水そうで一人でくらし始めました。でも、体が弱っているからか、えさを食べようとしません。水そうのそこでじっとしていることが多くなり、ぼくは、カタッポが息をしているか、しょっちゅうえらをかくにんするようになりました。そして三日目の朝、カタッポは死んでしまいました。

ぼくは、お母さんに、カタッポを土にうめるやくそくをして学校に行きました。

家に帰ると、あじさいの葉っぱにのせていたはずのカタッポがいなくなっていました。少しはなれた所に黒いかたまりが見えて、ぼくはぞっとして足が止まりました。ありがカタッポを運んでいたからです。ぼくは取り返そうと思ったけど、ありも大きなえ物をつかまえて必死に運んでいて、ぼくはありのはく力に負けて動けませんでした。すると弟が、「食べていいよ。」と言いました。ぼく達は、家でかっているかぶと虫やめだかが死んだら土にうめます。土にうめると、土の一部になって植物のえいようになるからです。カタッポはありの体の一部になって、ありの命をつなぐから、ぼくも「うん。食べていいよ。」と言ったら、ぼくのむねがすっとしました。

講　評

愛情込めて飼育するが、死んでしまった「カタッポ」。土に埋めようとしていたところ、大量のありに巣穴へ運ばれる様子を目の当たりにするが、その力強さに圧倒され手を出すことが出来なかったと綴る。「胸がすっとした」との終わり方は、自らが葛藤の中から一歩踏み出した、万感の想いが込められている。水そうごしに見る「カタッポ」の孤独でさみしそうな描写のほか、金魚、あり、それぞれの命の力を巧みに表現できている。

優秀賞・選考委員長賞

「バイバイ」

京都教育大学附属京都小中学校　五年A組　永井　雄大

「三連休は、ばっちゃんの家で毎日ごはんを食べよう。」
お母さんはそう言って、すべての予定をキャンセルした。ばっちゃんは、お母さんのお母さん。つまり、僕のおばあちゃんだ。ばっちゃんは、一年前から病気で入院したり、退院したりのくり返し。二週間前にばっちゃんは退院していたけれど、コロナのせいでなかなか会いに行けなかった。けれど、自宅待機している場合ではない、とお母さんが言っていたので、家族全員でばっちゃんの家へ向かった。僕の家からばっちゃんの家までは、車で5分のきょりだけど、ひさしぶりに会えるのでわくわくした。ばっちゃんは、見た目は別人みたいに変わっていた。かみの毛はぬけて、とてもやせていた。でも、中身はそのままだった。三日間いっしょにごはんを食べたり、トランプで遊んだり、話をたくさんした。だけど、最後の日は、ばっちゃんは起き上がれず、話もできなかった。家に帰る前に僕は「バイバイ。」と言って手をふって帰った。

朝起きたらお母さんはいなかった。僕がねている間に、ばっちゃんは天国に行ってしまったらしい。「バイバイ。」が本当にお別れの言葉になってしまった。お母さんは、ばっちゃんの家へ行ったり来たりしていそがしそうだったけど、元気がなかった。僕も何もしていないのになんだかしんどかった。きのうまでごはんを食べたり、遊んだりしていた人が、今はもうこの世界にはいない。理解できるようなできないような、不思議な感じ。とにかくなみだが流れ出てくる。不思議な気持ちと悲しい気持ちが僕の心の中にある。

死ぬってどういう事なの。命ってこんな急に終わるものなの。ばっちゃんの体はあるけど、中身はどこにいったんだろう。六十三年間の思い出や記憶は、どこにいったんだろう。生きたくても生きられなかったばっちゃんは、どんな思いで天国に行ったんだろう。わからない事だらけだけど、一つだけ分かった事は、残された人は悲しいということ。もっと話したかったし、もっと遊びたかった。おそう式でみんな泣いていた。悲しくて、さみしくて泣いていた。僕もなみだがとまらなかった。一つの命が消えてしまうことが、こんなにつらいなんて、初めて知った。

ばっちゃんがいなくなる四ヶ月前、四人目の弟が産まれた。その時はみんながよろこんで、うれしくてたまらなかった。ばっちゃんもうれしそうに弟をだっこしていた。産まれてくる命はこの世で一番かがやいていると思う。

命って目に見えないし、どれだけの長さか分からない。自分のものなんだけど、その命で人の気持ちをたくさん動かす力があるのかなと思う。弟と大文字を見ながら、心の中でばっちゃんを見送った。僕の命、ばっちゃんの分まで大切にして生きていくよ。

講　評

自宅で療養生活を送る祖母に会いに行き、帰り際にかけた言葉が本当に最後の別れの言葉になってしまう。そんな話が飾らず自然体で素直に表現された作品。祖母の死に際し、様々な想いや現象に自問自答を繰り返し、「わからない状態」をしっかり書けており、作者にしか書けない特徴ある作品に仕上がっている。弟を抱く元気な頃の祖母の回想シーンやその弟とともに大文字の送り火に祖母を見送るなど、時間経過の展開と祖母への想いの変化も巧みに表現されている。

優秀賞・選考委員長賞

「ぼくのいのちの音」

神戸市立こうべ小学校　六年二組　清水　櫂

ぼくの心臓からは「カチカチ」という音がする。

ぼくは、生まれたときから大動脈弁きょうさく症という心臓の病気を持っている。そして五才のときに、悪い弁を人工の弁にかえる手術をした。ふつうは心臓の音が「ドクドク」だけれど、ぼくの心臓からは、人工弁からの、「カチカチ」という音がするのだ。お母さんは、毎晩、ねているぼくの「カチカチ」という音をききながら、「この音が止まってしまったらどうしよう」と思うらしい。だから、ぼくにとっては、「カチカチ」という音がいのちの音だと思っている。

四年生の冬休みに公園で遊んでいたとき、ぼくは意識をなくしてたおれてしまった。毎日のんでいる薬の影響で、鼻血が止まりにくくなっていたせいで貧血になり、心臓がおかしくなってしまったらしい。その後、すぐに病院へいき、お医者さんからは、

「今回は心臓がもう一度動き出したからよかったですね。」

と言われた。それを聞いたとき、ぼくは、自分の命がそんな簡単に終わってしまっていたかもしれないということがこわかった。

家に帰ってから、ぼくはこれからのことをお母さんと話し合った。簡単に終わってしまいそうだったぼくの命を簡単に終わらせないようにこれから気をつけることを決めた。それはどれも命を守るのに特別難しい約束ではなく、ふだんの生活で、少し気をつければいいだけのことだった。ぼくは病気をもっているおかげで真剣に考える機会があったが、病気を持っていない人でも、事故などで、命をおとしてしまうことがあるということを意識してほしいと思う。

ぼくのいのちの音は「カチカチ」で、他の人の音は「ドクドク」だ。いのちの音はちがうけれど、自分にとっては、いのちはたった一つで、大切なものだということにちがいはない。いのちの音が止まらないように、大切にしていきたいと思った。

講　評

人工弁ゆえの「カチカチ」という心臓の音。他の人とはいのちの音は違うが、唯一無二の大切な物ということには変わりないとし、この音が止まらないように大切にしていきたいと綴る。いのちについて、「音」をテーマに、過去の事例や今の話など時間の経過も取り入れながら具体的に語られており、無理なく結論付けられている。母と決めたいのちを守るための約束事、どんなことを話し合ったのか興味が尽きない作品である。

優秀賞・選考委員長賞

「コロナ禍で気付けた事」

京都市立久世中学校　一年二組　南　俐亜

二〇二〇年三月から多くの人が感染し、世界を強くおびやかす新型コロナウイルス。現在は第七波が猛威を振るっています。第六波ごろからより身近に感じていましたが、ついにその時がやってきました。夏休みに入ってすぐ、小学生の妹がコロナウイルスに感染したことが判明したのです。

同じ家の中で家族全員がバラバラに生活するという不穏な空気の中、自宅療養が始まりました。それは、二日目の朝でした。起きたばかりで力が出ず、ぼうっとしていましたが、何か重いものが落ちるような音で目が覚めました。同時に、妹の名前を何度も呼び叫ぶ母の声でただごとではないと悟り、部屋を飛び出しました。扉の向こうにはぐったりと倒れた妹と妹を抱きかかえ必死に妹を呼び起こす母がいました。妹に意識はなく、しばらくすると硬直し、小刻みに震え出しました。いつもと違う、青白い顔の妹を見て、コロナウイルスの怖さを思い知らされました。すぐに救急車を呼びました。幸いにも、救急車が到着するまでに妹の意識は戻りましたが、二日ぶりに見た妹は少しやせているようで、とても心配になりました。救急隊員が家に到着し妹の容体を聞くと、電話をかけ始めました。どこの病院でも、意識が戻った妹はコロナ患者の中でも軽症とみなされ、受け入れができないとのことでした。電話の向こう側はとてもひっ迫しているように感じました。しかし私は、「妹も治療を受ける権利があるのではないか」と思いました。でも、医師たちはひっ迫した医療現場で重症の患者を助けなければいけません。だからこれは仕方のないことなのかなと思います。妹を受け入れられないということを伝える救急隊員の顔は今でも忘れられません。仕事だとはいえ、辛かったと思います。このような状況は本で読んだり、医療ドラマなどで見たりしました。また、ニュースでもコロナ禍の医療状況も見ていましたが、まさか自分の家族が当事者になるとは思ってもいませんでした。

私は、この経験を通して改めていのちの大切さに気付けました。当たり前に過ごしていた日々の日常を大切にしなくてはいけないと思いました。その後、妹は数日の療養で回復し、いつも通りの妹に戻りました。日頃はけんかばかりしているのですが、妹が生まれてきてくれて、元気に生きてくれていることに感謝したいです。それは両親も同じでこの療養期間を通して改めて家族の大切さにも気付けました。家族がいてくれるからこそ、幸せに生きることができています。それを当たり前に思わず、感謝しながら過ごしたいです。

そしてもう一つ大切なものに気付きました。それは、「友達」です。この療養中に、友達は嫌な顔一つせず励ましてくれました。中には、妹の体調を気づかい果物の差し入れをしてくれたり、退屈だろうと連絡をしてきてくれたり、同じように療養中の友達とは、お互いに励まし合ったりしました。私は、常に友達に支えられていることに気が付きました。たくさんの友達のおかげで前向きで楽しい日々を過ごせていることに感謝したいです。

まだまだ先の見えないコロナ禍中ですが、毎日健康に過ごしていることを当たり前に思わず、自分の「いのち」も他の人の「いのち」も尊重し、大切にしながら過ごしていきたいなと思います。そして、いつもの笑顔が戻った妹と家族との時間を大切にし、たくさんの友達と支え合ってこれからも前向きに成長していきたいです。

講　評

妹の新型コロナウイルス感染により家族内での隔離生活が始まったが、妹の症状の急変に救急車を呼ぶことに。苦しむ妹を受け入れてくれる病院が見つからず、最後は「搬送できない」と言う救急隊員に対し、そう言わなければならなかった隊員の方もつらいのだとおもんばかる優しい気持ちにも好感が持てる。コロナ感染の様々な苦しみと、自宅療養期間中に受けた友人の支えへの感謝が、実体験ゆえの迫力をもって表現されている。

優秀賞・選考委員長賞

「そんな時間が好き」

東大阪市立高井田中学校　二年二組　中西　拳敏

みんなは、いのちについて考える時間が学校の授業以外でありますか?僕は、意外と家でふとした時に考える事があります。特に静まりかえった寝室の布団の中。考えると言うよりかは、自然と頭の中に浮かんできます。「どうして生きているのか」「死ぬってなにか」「どうせ死ぬのになぜ物を買ったり頑張ったりするのか」考えた事ないですか?僕は、小さい頃からそれが気になってよくお母さんにシーンとした部屋でとつぜん聞き出しました。お母さんは「なにから命が始まったか知らんし、死んだ事がないから死んだらどんな気持ちとかも分からんけど、どうせ死ぬから頑張らんじゃなくて…いのちの最後が死って決まってるんやから物を買ってワクワクしたり頑張ったりする事を楽しんだらいいやん。マイナスに取るんじゃなくてまずは、プラスに取ることからしてみいや!」といいました。「そうやな。」って納得して寝ました。だけどまた次の日の就寝時に不安になったり不思議になったりします。自分でもなぜこんな事が毎日毎日気になるのか分からないです。気になるたびにお母さんに同じ事を聞いて同じ返事を貰います。同じ返事なのを分かっていてまた聞きます。だけど口に出す事で安心している気がします。たまに「また?」「始まった(笑)」と笑われることもありますが気になるから仕方ないです。こんな事をしょっちゅう聞く僕は、変なのかな?と思う時もあったけど、お姉ちゃんが言いました。「現代の子は、暇があればスマホを触ったり寝る寸前までスマホ眺めていて考える時間が昔の子に比べると少なくなっているってテレビで言ってた。けどあんたにはちゃんとなにかを時間や向き合う時間があるってことやから変とかおかしいんじゃなくていい事ちゃう?」と言ってくれました。いつもは、ゴチャゴチャうるさいお姉ちゃんですが自分が不安に思っている事へのフォローをしてくれてなんだか嬉しかったです。

話がズレてしまいましたが結局いのちとは、大人も子供もみんなが当たり前にわかっているようで分かっていない物。物と言っていいかも分からないもの。「どこからきた?」などの質問に正解を正確に答えられる人がいない誰も分からない物なんだと思います。なにか分からない。だけど僕は、せっかく命のある人間と言うものになったんだからこの命を大切にしたいです。大切の仕方は、人それぞれだと思うけど僕の大切とは、お母さんが昔からよく言ってくれた「ワクワクする」「楽しむ」「いつもプラスに」をやってこそだと思います。たまには、辛いし悲しいマイナスな時もあるけどそれもまた命のある人生です。それも楽しんでいこうと思います。

僕に命をくれたお父さんお母さんありがとう。いつも眠たいのにいのちってなんやろう?の話に付き合ってくれてありがとう。昔に比べると聞く頻度は減ったけどまた聞いてしまうと思います。その時は、また付き合って下さい。家族で電子機器から離れてそんな話をする時間が僕は、密かに好きだったりします。

講　評

夜な夜な「どうして生きているのか?」と考え母に尋ねてしまう。変かなと思うも、そんな自分を「スマホばかりでなく、何かに向き合う時間があるのは変ではない」と姉が上手くフォロー。タイトルにもあるように家族の時間をしっかり肯定し、スマートフォンが手放せない今の世の中にあって、敢えてスマホを止めて考えるという行動に思いを寄せている。そこには現代社会に対して一つのアンチテーゼが伺える。中学生らしい印象深い作品である。

優秀賞

「せみの命」

姫路市立旭陽小学校　一年二組　鵜飼　一有

にわをあるくのらねこが、なにかをくわえている。ぼくが「あっ」と言うと、くわえていた物をおとして、あわててにげていった。なにをおとしたのか見にいくと、うかするまえのセミのようちゅうだった。いきているかしんぱいだったがうごいたので、そっとザクロの木のねもとにおいて、かんさつすることにした。

セミは土の中で7ねんかんすごすので、このようちゅうはぼくよりまえにうまれたのだろう。ぼくが一ねんせいになるまでずっと土の中でくらしていたのだとおもうとそのながさがよくわかる。やっと土の中からちじょうにでてきたところで、ねこにかまれてききいっぱつだったがたすかってほんとうによかった。

セミのうかがはじまった。ぼくがふくをぬぐときのようにぱっとはいかず、まずせなかがわれ、ゆっくりゆっくりじかんをかけあたまをだし、はねをだしていく。からからでてきたセミはぼんやりひかるみどりいろのようなはじめてみるいろだった。からだぜんぶがからからでてきたところで、あめがふりだした。ぼくはかさをさしてあげたいきもちだったけれど、しぜんの生きものはじぶんのちからでのりきらないといけないとおかあさんがいったので、かさをさすのはやめておいた。しわしわのはねがちゃんとひろがるのかしんぱいだったが、ぼくはねてしまった。

あさめがさめて、すぐにザクロの木をみにいったが、ぬけがらだけのこしてセミはもういなかった。

セミがちじょうですごす一しゅうかん。ぼくは「みじかいな」とおもうけれど、ぜんりょくでいきるセミはそんなことおもわないのだろう。いのちをつぎにつなげる大きなしごとがまっている。

8月になると、にわのあちこちにセミが、おちている。そっとひろって土の上においてやる。あのセミもいっしょけんめいにいきたのかなとかんがえる。

「ぼくとかぶとむし」

姫路市立伊勢小学校　一年　仁後　颯太

なつやすみにおかあさんのともだちからかぶとむしをもらった。おすが3びきにめすが1ぴき。そのうちの1ぴきのおすが1つつのちいさいかぶとむしだった。そのかぶとむしは、からだがちいさく、つのがはんぶんくらいみじかい。けど、そのかぶとむしはよくうごいて、げんきだった。

ぼくは、くらすのなかで1ばんせがひくい。どうしてせがちいさいのか、おかあさんにきくと、ぼくはちいさくうまれたそうだ。おかあさんとはやくあいたくて、おなかのなかからはやくでたのだとおもう。ちいさくうまれるともんだいがおこる。めがわるい。それでひめじのびょういんから、おおさかのびょういんにいった。ヘリコプターでいった。ぼくがはじめてのったのりものは、ヘリコプターだ。これはちょっとしたぼくのじまんだ。

ぼくのうまれたときのおもさは、488グラムだ。ペットボトルのおちゃよりもかるい。ちいさくうまれたけど、いまはげんきだ。こうえんであそぶのがすきだ。ブランコやすべりだいはたのしい。ふんすいのところでするみずあそびもおもしろい。しょうがっこうのうんどうじょうでは、ともだちとおにごっこをしたりする。はしるのがおそかったりするけど、いっしょうけんめいはしる。うんどうかいのときょうそうでは、ぬかれちゃったけど、つぎはぜったいまけたくない。

カブトムシもぼくも、ちいさくても、げんきだ。めいいっぱいいきている。

「いつもいっしょに」

私立智辯学園和歌山小学校　二年二組　鳥　翔太郎

「何も出来なくてごめんね。」

ぼくが手をひいてあげると、いつもひいおばあちゃんはこう言う。ぼくのひいおばあちゃんは、びょう気で目が見えなくなった。見えていたのが、まったく見えなくなるってどんなかんじだろう。ぜんぜんわからない。でもごめんねって言われると、しんぞうがぎゅうっていたくなる。

だっておばあちゃんは、ぼくにたくさんの話しをしてくれるから。毎日ぜったい

「しょうちゃんやみんなは元気かい。」

と聞いてくれる。ぼくらのことをいつもしんぱいしてくれ

優秀賞

る。やさしいおばあちゃんが大すきだ。

この間も、しゅくだいをしていたら、ことわざをおしえてくれた。笑う門にはふく来たる。いつもわらっていたらいいことがあるよというういみだ。

ひいおばあちゃんは、ごせんぞさまをとても大じにしている。だからぼくも毎日ほとけさまにおまいりしているし、ごはんのおそなえもぼくのしごとになった。

一番だいじな平和の大切さもひいおばあちゃんが教えてくれた。せんそう中は食べものがなかったし、ひ行きでこうげきされたこともあったらしい。平和がどれだけしあわせかよくわかった。ごはんも大じに食べている。

ひいおばあちゃんがおしえてくれたことは、ぜんぶ昔からある大事なことだ。ひいおばあちゃんはぼくの大切な家ぞくで、いろいろなことをおしえてくれてとってもうれしい。

だから目が見えないからって

「ごめんね」

ってあやまらないでほしいな。

「ありがとう」

のほうがうれしいよ。

おばあちゃん、いつもいろんな話をしてくれてありがとう。これからもたくさんおしえてね。手をひいて、いっしょに歩こうね。

「魚と一緒に泳げるよ」

私立智辯学園和歌山小学校　三年一組　上村　晃司

魚のイワシが主人公の絵本を読んだことがあります。海で泳いでいたイワシがりょうしさんにつかまってスーパーで売られて、ばんごはんのおかずになって、男の子に食べられてしまいます。でも、それでお話は終わりません。イワシは食べられることで、男の子の体の一部になって、次は、プールで泳げるようになりました。

イワシが死んでしまった場面で、ぼくはさみしくて悲しい気持ちになりました。それに、イワシのことをかわいそうと思いました。

でも、大事に食べてもらえたイワシは、カルシウムやたんぱくしつというえいようを男の子の体にとどけてくれました。男の子は、まるで魚の様に、ぐんぐんすいすい泳いでいました。イワシはもう一度、男の子の体を通して水の中を泳げるんだと気づくと、ぼくも元気な気分になれたし、イワシからえいようをもらいたいと思いました。

ふと、気づいたのは、絵本のイワシが死んだ時はかわいそうだと思ったのに、スーパーの魚売り場へ行くと、ずらりとならんだ魚を見て、

「きれいだな。」

とか、

「おいしそうだな。」

と、思うことです。絵本を読んでいた時は悲しいと感じたのに、スーパーの魚売り場でキラキラするイワシを見るとわくわくするので反対のことを感じてふ思ぎに思います。

そこで、ぼくはどっちもぼくの気持ちだから、両方の気持ちを大事にしようと思いました。おかずに魚が出てくると、のこさないように食べて、ぼくと一緒にスイミングの時にプールで泳げるようにしました。魚達のおかげできっと上手に速く泳げるようになれると信じてがんばります。

「私の命」

私立大阪信愛学院小学校　四年　秀坂　瞳

私は、４才の時に「いのち」をうしないかけました。なぜかというと、インフルエンザで熱が出て、お昼ごはんの時に気持ちがわるくなってそのままいしきをうしなったそうです。心ぞうが止まってしまってようち園の先生が人工こきゅうをして下さって心ぱいそ生してくれたそうです。ＡＥＤを使う前に救急車が来て、その時に息をふき返し、そのまま救急車にのって病院へ行ったそうです。私は病院でお母さんが泣いて抱きしめてくれている記憶しかありませんが、いま生きているのはようち園の先生の素速い対応のおかげだと教えてもらい、ずっと覚えています。「いのち」は地球に生きる物すべてのみんなにとって、一つしかない大切なものだと思います。しんでしまうともう会えなくなり、新しい思い出を作れなくなるからです。「いのち」、「自分の生きている時間の事だよ」とお母さんに教えてもらいました。この生きている時間を、どういう風に使うのか考

優秀賞

「カナブンの命」

大阪市立大淀小学校　四年一組　宮本　一世

ぼくは夏休みの間、おばあちゃんの家に遊びに行きました。おばあちゃんの家は山の中にあって、昼も夜もたくさんの虫がやってきます。虫が大好きなぼくは、つかまえた虫を虫かごに入れて観察するのが大好きでした。

その日はベランダにいた一匹のカナブンをつかまえることができました。おばあちゃんはいつものように「観察したら元気なうちににがしてあげるんやで。」とぼくに言いました。

それからぼくはフンのにおいでくさくなったカナブンを水につけて洗ってしまいました。おばあちゃんは何度も「カナブンが死んでしまうからやめなさい。」と言いましたが、ぼくは水につけた位で死なないと思っていたのでおばあちゃんを無視して洗い続けました。するとカナブンは動かなくなってしまいました。ぼくはその時、急に死んでしまったのでおどろきました。カナブンが死んだことを知ったおばあちゃんは、こう言ってしかりました。

「カナブンだって一世と同じ命のある生き物なんだから、そんなことをしたらカナブンの大事な人生が、めちゃくちゃになってしまうやん。カナブンだって一世につかまりたくてベランダに来たんじゃないねんで。」

その夜はおばあちゃんの言葉を思い出しました。自分がカナブンをつかまえなかったら今ごろ家族に会えたり、おいしい樹液をなめたり、卵を産んだりできたかもしれないと考えていました。

悲しい気持ちでその夜はねむりました。すると次の日の朝、カナブンを見てみると、なんと生きかえっていました。うれしい気持ちとゴメンという気持ちになり、ぼくはすぐにカナブンをにがしました。

このカナブンは自分に命の大切さを気付かせるチャンスをくれたのだと思います。

人も虫も生き物みんな、命は全てむやみにとってはいけない物です。

「命をつなげるひまわり」

大阪市立堀江小学校　五年二組　相本　花奈

今年の夏、私はひまわりを育てた。一つの植木ばちに種を三つまいた。私は、何だかすごくワクワクして、

「きれいな花が咲くのが楽しみだね。」

と言った。すると、母は

「そうだね。元気に大きくなるといいね。」

と返してくれた。

そしてその日から、毎日、母と世話をして大切に育てていった。するとひまわりはそれにこたえるようにぐんぐん成長していった。まるで自分の子どものような気がしてすごくかわいく思えた。

「元気に育ってる！」

と母もうれしそうに言っていた。

本葉が出てきた頃に、

「まびきといって、一番元気なひまわりを残して残りの二本は抜かないといけない。」

と母が教えてくれた。私は、ここまでがんばって生きてきた命を抜いてしまうなんて悲しすぎると思った。それに、三本共元気そうで、一本を選ぶことなんてできそうにない事だと思っています。私ががんばっている事があります。一つめは、ピアノもう一つはバイオリンです。ピアノもバイオリンも、一日練習しなかったら小指が動きにくくなり、二日休むと薬指が動きにくくなって三日やらないと、音符も読みにくくなって、十本の指もなめらかに動かなくなります。ひけていた曲がひけなくなった時が一番悲しいので毎日練習します。ピアノは、けんばんを押せば、その音が出るけど、バイオリンは指で音を作るので、指がわすれるともっと大変なので私のバイオリンのいのちは、「私ががんばらないと育たないんだよ。」とお母さんに教えてもらいました。毎日、すこしずつ進んでいく時間と同じように、これからも私が生きている時間を大切に自分ががんばってできることを、しっかりやって生きている今を大切にしたいです。これからも一日、一日を大切にします。

優秀賞

かった。

「全部育てることはできないのかな。」

と母に聞いた。すると、

「上手に植えかえればできるかも。」

と答えてくれた。まだ生き続けられることがとてつもなくうれしかった。

その数日後、肥料を買ってきて、栄養分たっぷりの土に二本を植えかえた。命を二つ救った気分になった。細い根がちぎれないように、大切に手でとり出したけれど、うまく根がつくかどうか心配だった。一週間位、ぐらぐらしていたひまわりだったけど、また根をはって育っていった。がんばって生きようとしているんだと思った。

七月に入ると、三本のひまわりは無事に花を咲かせた。でも、喜んでいたのもつかの間、花も葉も、くもの巣のようなものにおおわれていた。調べてみると、どうやら、「ハダニ」という小さい虫がついたらしい。こういう時は、殺虫剤を使うのが一番手っ取り早い。だけどそうはしなかった。殺虫剤を使ってしまったらその虫が死んでしまう。なぜだかその時、生きているのだから大切にしたい。と思った。そこで母と水で少しずつ、少しずつ、根気強くくきから落としていった。この時も、命を救った気分になった。

それからしばらくすると、なんとひまわりが枯れていた。種もまだとっていないのに…。本当にあせったし、おどろいた。だけど後から、ひまわりは枯れてから種を作る植物だと知った。あせったのと同じくらいほっとした。そして、新しい命を作っている真最中なんだと思うと、胸がときめいた。あとは種をかんそうさせて取れば、また来年もひまわりを育てることができる。

私は、ひまわりも人間みたいだと思った。小さな種から生まれ、次の種を残していく。途中で他の命をもらうこともある。自分が生きていくために、さけられないことだけど、小さな命もできるだけ無駄にしたくない。

「ぼくの名前」

福崎町立福崎小学校　六年三組　牛尾　明日駈

ぼくの名前は、明日を駈けると書いて明日駈（あすか）といいます。この名前には、お父さんとお母さんの願いがこめてあります。

ぼくは、出産予定日より４ヵ月はやい二十三週五日で生まれてきました。ふつうは、四十週で生まれてくるそうです。体重は、６０２gでした。ふつうは、２０００g～３０００gで生まれるそうです。だからぼくはとても小さく生まれてしまったのです。ぼくみたいに、とても小さく生まれてしまった子のことを、超低体重児と言います。早く小さく生まれると体が完全に出来上がってないので、そのまま生きられるかどうか分かりません。ぼくの場合は、生存率は、60％と言われました。まずは、24時間が山と言われ、その次は、48時間、72時間、一週間、二週間、一ヵ月、三ヵ月の山とお医者さんに言われてきました。その間ぼくは、ＮＩＣＵで保育器に入って、たくさんの管につながれていました。初めは、おへそから母乳をもらっていて、次は、口から胃に管を入れて直接胃に母乳を入れていました。体重が１５００gくらいになったら、ほ乳びんで口から飲むようになりました。その間ずっとお母さんは、母乳を持って来てくれました。おかげで、大きな感染症にもならず、すくすく大きくなって、ＧＣＵに移りました。ＧＣＵでは、退院に向けて、自発呼吸にしたり、お母さんから、直接母乳を飲む練習をしました。その時、おっぱいを飲むのに夢中になりすぎて、ぼくの呼吸が止まってしまってアラームがなってこわかったとお母さんが言っていました。最後に、お父さんとお母さんが何回かお風呂に入れる練習をして、つれてかえっても大丈夫ってお医者さんから許可をもらって退院しました。結局、四ヵ月半の入院になりました。お医者さんや、看護士さんが病院で一生懸命お世話をしてくれたから、今のぼくがあります。ぼくは、十二月で十二才になります。身長は、１４２㎝、体重は、40kgになりました。ぼくの生存率が、60％と聞いて、明日も生きられるようにと願いをこめて、明日を駈けると書いて、明日駈と付けてくれた名前の通り、ぼくは、毎日元気に過ごして大きくなりました。ぼくは、この名前が大好きです。お父さん、お母さん、すてきな名前をありがとう。

優秀賞

「いのちをつなぐ音楽の力」

姫路市立広畑第二小学校　六年二組　加藤　野々香

小学校生活最後の音楽会。今年は3年ぶりに合唱をすることができた。コロナのえいきょうで今まで当たり前だったみんなで歌を歌うということができなくなっていたからこそ、今年の音楽会は特別なものだった。曲は私の好きな「いのちの歌」だ。私はピアノ伴奏をすることになり、歌詞の意味を考えながら、毎日練習をがんばった。ひとつひとつの言葉が心にひびき、ふと涙がでてきた。私はこの曲を歌うことで伝えたいことは何だろうと考えた。私が思ったことは、今、生きているのは両親、祖父母…とずっとさかのぼっていって、命がつながってきているということ。たくさんの命がつながって、今私がここにいるんだということ。それはきせきであり、幸せだということ。そして、「ありがとう」と感謝の気持ちをこめて、まずは両親に伝えたいと思った。歌の意味を考えた上でピアノをひくと目の前にある景色が変わった気がした。

今回、家で練習する時はお父さん、お母さん、お兄ちゃんが一緒に歌ってくれた。そして、みんなで涙ぐんだり、音がずれているよと笑ったりして、家族で過ごせる時間は幸せだなと感じた。学校ではマスクで歌うことになったけど、みんなで心を一つにして取り組んだことは私にとって、一生の思い出になった。

毎日、テレビではウクライナの映像が流れている。どうして何の罪も犯してない方々が毎日いつ殺されるかわからずにおびえて暮らさないといけないのかと心がいたくなる。ウクライナから日本へひなんしてきた人が、

「歌や音楽には平和にしたりするような力があり、平和な国で生きたいという願い、命は大切だという思いを音楽の力で伝えたい。」

と話しているのを聞いて、音楽は国境をこえて人と人とをつなぐ道具ではないかと気づいた。

コロナのえいきょうで歌うことが難しいと言われたり、音楽は不要不急だと言われていたけど、音楽はやっぱり、人にとってとても大切なものだと思う。私がようち園の時から続けているピアノ。駅にあるストリートピアノでひいた時、知らない人から拍手をもらったり、

「よかったよ。」

と声をかけてもらえることで、私自身がはげまされ、幸せな気持ちになった。私は、音楽で人を勇気づけたり、人の心にひびくような演奏で「いのち」をつないでいけたらいいなと思った。

「かけがえのない命」

姫路市立船津小学校　六年二組　福永　倫大朗

ぼくには、働き者でがんこだけど優しいおじいちゃんがいた。四年前に心臓に病気が見つかって、死んでもおかしくない状きょうで手術をし、一命をとりとめた。でも、ペースメーカーを入れて心臓の動きを管理していた。そのころからおじいちゃんは、自分の命が長くないことを分かっていたと思う。なぜなら、家のあちこちを修理してくれたり、ぼくたちが困らないように考えていてくれていた。

そんな中二年後に肺の病気が見つかり、心臓が悪いので手術は難しいと言われたが、おじいちゃんは生きるために手術に挑戦し今回も成功した。ぼくは何でそんなにがんばれるのか不思議に思った。肺を切ってから息が切れて、すごくしんどそうな時もあった。それでもおじいちゃんは田んぼや畑に行って毎日働いていた。おじいちゃんはさらに、エクステリアの仕事をしていたので、近所の人からドアやあみ戸の修理をたのまれるといやな顔一つせずすぐに直してあげていた。家族のためみんなのためにおじいちゃんは本当にがんばっていた。ぼくならそんな体で絶対にがんばれないと思う。そんな強いおじいちゃんは無てきだと思っていた。

別れは突然だった。ぼくが学校に行っている時に亡くなってしまった。最初は信じられなくて「うそだ！あの強いおじいちゃんが何で…」となみだも出なかった。ぼくは自分のことを冷たい人間だと思った。でも本当に信じられなかったのだ。昨日まで一しょに暮らしていたのに、突然いなくなり、もうしゃべることもできないなんてありえないと思った。

おじいちゃんとのお別れが終わってぼくはいろいろ考えた。命は永遠ではないのだから、今を一生けん命生きない

優秀賞

「祖父の初盆」

京都市立上京中学校　一年五組　岡田　晴介

今年三月、僕の祖父が亡くなった。祖父は僕の卒業式を待っていてくれたかのように、その翌日に息を引き取った。その死は僕にとって初めての身近な人の死だった。

僕は京都、祖父は和歌山と離れて生活していたためお正月やお盆などの長期休みでしか会えなかった。祖父の家に行った時は海や川、山、公園などといろんなところにつれていってくれたりたくさん話してくれたりと思い出が増えていった。しかし、闘病中最後の一年、祖父は京都の病院で治療を選び頻繁に会えるようになった。学校から帰ったら祖父がいる期間もあった。その期間でたくさん話して、とても中身の濃い時間を過ごすことができた。だからこそ祖父が亡くなってしまいもう話せない、もう遊べないとなると悲しくて涙が止まらなかった。

夏休みは、祖父の初盆だったので僕は和歌山へ行った。とそんする気がした。楽しいことばかりではないかもしれないけど、絶対にこの命を大切に生きようと思った。

ぼくの命はぼく一人のものではなく、おじいちゃん、おばあちゃん、多くの人から受けつがれてきたものだと思う。自分のため、人のためにできることを精一ぱいやりたい。

今、世界では戦争をしたり、悲しいニュースがたくさんあるけど、粗末にして良い命なんて一つも無い。また、いじめやストレスによって自殺をする人もいる。悲しすぎると思う。でもそれも全て人間のやることだ。だったら同じ人間のぼくにも何かできて助けたり、戦争だってやめさせられる力があるのではないかと思う。

もう、おじいちゃんはいないけど、通学路にある畑の前を通ると「おかえり」と言ってくれる声がぼくには聞こえる。

今までぼくは命についてこんなに考えたことない。ぼくにはやりたいことがたくさんある。おじいちゃん達に感謝しながら、精一ぱい楽しんで生きるとちかう。

祖父の同級生や近所の人、親せきの人などたくさんの方々がお参りに来てくれた。その人たちはみんな祖父の思い出話をしてくれた。

「ひろむさん（祖父の名前）は若いころよくギターを聞かせてくれたよ。その音色はとても優しく、ぼくはその音色が大好きだったよ。」や「クラシックが好きで、よく聴いていたなあ。」「ログハウスのオーディオルームを作って、そこで音楽を聴きたいよ、とも言ってたのになあ。」などの音楽に関する思い出話や、「みかん作りに熱心な人で肥料や栽培の仕方などをよく研究していたなあ。」や「ひろむさんのみかんとってもおいしくて親せき中の人が、ひろむさんのみかんを楽しみにしていたよ。」などのみかん農業についての思い出などを話していて、ぼくの知らない祖父の一面を知れた初盆になった。そんな思い出話を聞いているうちに、祖父は死んでしまったけれど人々の心の中で生き続けているんだなと、強く思うようになった。

祖父の死は僕たち家族にとってとてもつらいことだったが、そんな中でも嬉しいこともあった。それは二月に祖父の孫、僕のいとこが生まれたことだ。祖父は、闘病中でも孫をかわいがり、いとこも祖父になついていた。

これらの出来事で、昔習い事でなんとなく歌っていた竹内まりやさんの「命の歌」の歌詞

いつかは誰でもこの星にさよならをする時が来るけれど
命は継がれてゆく　生まれてきたこと　育ててもらえたこと　出会ったこと　笑ったこと　そのすべてにありがとう
この命にありがとう

この歌詞が、今ではとても心に響くなと思った。僕はこの歌詞の「命は継がれてゆく」という部分に心が揺らされた。この夏は祖父の死を通して命の大切さについて深く、深く考えることのできた日々だった。

「ありがとうじいちゃん」

長浜市立南中学校　一年四組　角川　心美

私には従姪がいます。一年半前に従姉妹が赤ちゃんを産みました。私が抱っこをするとふわふわしていてとてもよく食べるおてんばな女の子です。いろいろいたずらをされても不思議と許せてしまいます。私は一人っ子なので姉妹がいないけれど年の離れた妹みたいでとてもかわいいです。そんなかわいいひ孫に一度も会う事なく、優しかった祖父は亡くなりました。

優秀賞

そんな母方の祖父は、口数が少ないけれど、お盆やお正月に帰省をした時に通知表などを見せると、どんな時でもほめてくれるとても優しい祖父でした。いつも味方でいてくれるそんな祖父が大好きでした。

私の小さい頃は、自分の足で歩けたので一緒に散歩をしたり、買い物に行ったりしていましたが、私が小学校中学年になった頃、認知症の診断を受けました。テレビなどで認知症という言葉は知っていたけれど、どこかで自分とは関係のない事だと思っていました。でも、いざ自分の身近な人がなってしまうと優しかった祖父はこれからどうなってしまうのだろう、私の事も忘れてしまうのかなと考えると、とても心配になりました。祖母や母や伯母達はすごくショックを受けていましたが、祖父のために何が出来るか、どうしてあげるのが一番良いのかをみんなで話し合いました。私も何か出来る事がないか考えました。なるべく話す事が良いと聞いたので、毎日電話をかける事にしました。電話で話す祖父は、今までと変わりない全然元気な声でしたが、会って話すと、たまにおかしな事を言ったりしたけれど、話している時の顔は今までと変わらないおだやかなままでした。私はこれまで通り接しようと思い、出かける時は歩くスピードを合わせてゆっくり歩いたり、毎日飲む薬の仕分けを手伝ったり、車いすで出かける時は、学校の授業で車いす体験をした時の事を思い出して押してあげました。何をしてあげても「こっちゃんありがとな。」と言っている祖父を見ていると、私でも役に立てたんだなとうれしかったし、ひょっとしてこのまま認知症が治っていったらいいのになと考えました。

けれど、祖父は突然亡くなってしまいました。亡くなる三日前までデイサービスに通い、電話で話したばかりだったのに、突然すぎて信じられませんでした。お葬式では、家族や孫が写っている沢山の写真と祖父の大好きだったコーヒーとチョコレートを準備して、送ってあげました。もう会えないんだなと思うと、さみしくて悲しかったけれど、じいちゃん今までありがとうという感謝の気持ちでいっぱいでした。

今、祖父の家に行っても、写真の祖父にしか会えません。だけどみんなで集まって話をすると、「じいちゃんあれが好きだったよね。」とか、「あそこ行った時楽しかったよね。」とか、祖父との色々な思い出が次々と出てくるけれど、突然この世からいなくなってしまった祖父は何か伝えたい事や、やり残した事は無かったのかなと考える事があります。きっと子供好きだった祖父は、ひ孫を抱っこしたかっただろうなと思います。いつも聞き役だった祖父は、きっとみんなが楽しそうに話しているのを見守ってくれていると思います。人の命はいつどうなるか誰にも分かりません。コロナ禍での生活で当たり前に出来ていた事が出来ない経験もしました。今、何不自由なく暮らせている事に感謝していきたいです。

「どう最期をむかえるか」

私立神戸学院大学附属中学校　一年二組　宮野　修弥

おばあちゃんの家に遊びに行くと、一階の和室にはいつもひいおじいちゃんがいました。ひいおじいちゃんはとても優しくて、遊びに行くといつも喜んでくれていました。

ある日、ひいおじいちゃんは風邪をこじらせて入院してしまいました。心配だったけれど、なかなかお見舞いに行くことができませんでした。おばあちゃんは毎日病院に通ってお世話をしていたようです。

やっとお見舞いに行けた時、ひいおじいちゃんは寝ていました。家にいた頃とは顔つきも身体もすごく変わっていて、病気なんだと改めて感じさせられました。鼻からも管を通して、腕には点滴が挿さっています。頬は痩けて、脚も腕もガリガリです。とても痛々しくて、せっかく会えたのに涙が出そうになりました。目を背けたくもなったけど、頑張ってるひいおじいちゃんをしっかり見ました。

おばあちゃんがそっと声をかけると、ひいおじいちゃんは目を覚ましました。こんな状態でもひいおじいちゃんはしっかりしていて、受け応えもできるし普通に会話ができました。全然弱音を吐かないし、退院に向けてしっかり前を向いている、そんな気持ちが伝わりました。

「おじいちゃん、今どんな感じ？」

僕が尋ねると、ひいおじいちゃんは

「喉が渇いてる。ジュース飲みたい。」

と言いました。

優秀賞

治療の過程で、ひいおじいちゃんは好きな時に好きなだけ飲み物を飲むことができない状態でした。おばあちゃんが時たま、綺麗な布に水を浸けて舌を湿らせてあげているようでした。喉が乾いても水もごくごく飲んじゃダメだなんて…それって本当にすごく辛い事なんじゃないかと思って、かわいそうで仕方がなかった。身体のどこが痛いだとか、辛いだとか、そんな事は一切言わないのに、頑張ってるのに、なんでなん…そんな想いが頭の中をぐるぐる駆け回りました。

それからも、母の時間がある時に僕も一緒にお見舞いに何度か行きました。もう退院できるだろうと思ってもなかなか上手くいかなくて先延ばしになったりで、かなり長い期間ひいおじいちゃんは入院していました。

「もういいやん。退院させてあげたら?」

「喉渇いてる言うてるやん、かわいそうやわ。飲ましたったらいいやん。」

母がおばあちゃんに言いました。

おばあちゃんは今はもう、ひいおじいちゃんが家に来てからは引退したけれど、ベテランの看護師です。ぐっと飲ませたら大変なことになるという知識もあるし、そうしてあげたくても出来ないことがたくさんあったのだと思います。それは母にも分かっていたし、それでもやっぱり大好きな飲み物をぐっと一口飲ませてあげたい。そんな気持ちが見えて、僕はまた涙をぐっと堪えました。

しばらくして、ひいおじいちゃんはそのまま病院で亡くなってしまった。最期の時に、母も僕も間に合わなくて立ち会う事はできなかった。ずっと側で看ていたおばあちゃんは、ひいおじいちゃんの最後の最後まで頑張っていた、息をひき取るその寸前までしっかり意識があった、だから余計に辛かったと言っていた。

ひいおじいちゃんはとても頭が良くて、歳を重ねても「ボケる」といったことがない人でした。そのおじいちゃんが、最後まで絶対生きるという想いで、身体中が痛い中、あきらめないまま天国へ行ってしまった。どんなに辛かっただろう。強気で病気と闘ったひいおじいちゃんを誇りに思うと共に、やっぱり僕は、母は、ひいおじいちゃんにジュースをグイッと飲んで欲しかった。でももうそれは叶わない。

和室にある仏壇にジュースがお供えされていることを、僕は今でも毎回確認する。次は僕が大好きなオススメのジュースを持って、おばあちゃんの家に遊びに行こう。

「自分らしい冒険をすること」

京都市立開晴小中学校　八年三組　表　桃花

私は、自分の見た目、内気な性格をコンプレックスに感じていて、小さいながらにそんな自分を「変えよう」と本気で思った。それが三年生のときだった。したことのない発表をしてみたり、クラスの色々な人に話しかけたりした。クラスの一部の人には「キャラ変だ」と言われ、とても怖かった。その一部の人には話しかけても無視されるようになっていた。本当に毎日感じたことのない恐怖心を抱いていた。四年生に入って、そのようなことはなくなったが、中学二年生の今でも、とても怖い。しかし、「変わらなくちゃ」という意志は折れず、今は委員会活動をし、クラスや学年をまとめられるようになってきている。そうした中で、今も自分の外見や、上辺だけの明るい性格の中にある内向的で周りを気にしすぎてしまう自分をコンプレックスに思っている。おかしいかもしれないが、「私に価値はあるか」と考えることもある。「命を絶ちたい」ではなくて、「命とはどういうものか」を私は知りたい。

まず私は、国語辞典で「命」と引いてみた。一つ目は『生物が生きるもとになる力。』、二つ目は『生きている間。一生。』、三つ目は、『いちばん大切なもの。』と書いてあった。もちろん、一つ目、二つ目も命の意味として適切だ。しかし私は三つ目の意味が最も適していると思う。今の時点で、年間交通事故の人数と同じ、もしくはそれより多いくらい自殺の人数が増えている。理由として、学生ではいじめが多い。いじめは自分の価値を自分で下げてしまう。特に被害者でいえることだ。自分の価値が下がると、全てが思い通りにならなくなった。私はそうだった。しかし、思い通りにならないときこそ、成長できるときだと思う。そこで、「助けてほしい」なんて言うことは難しいが、周りが、その人が言わずに助けることはもっと難しい。だから、だれでもいいから、「助けて」と頼ることは、大切で、成長で

優秀賞

「当たり前とは」

私立近江兄弟社中学校　二年二組　夏原　凛愛

学校に行けなくなって約半年。学校に行くのが当たり前だった日々とは裏腹に家にいることが当たり前の日々になりました。

中学一年生の冬休み明け、何か限界を迎えてしまい、学校に行けなくなった。もう何もしたくない。勉強も、友達と話すことも。それからの日々は一日中家にいてただただボーッとするだけ。いきなり学校に来なくなった私を心配してくれる友達さえもどうでも良くなってしまった。毎日生きてる意味を自問して悩んで。自分でもこれから先どうしていいか分からなくなった。気づけば三月中旬。一年の終わりを迎えていた。二年生になったら頑張ろう。毎日学校に行って、昔の当たり前を取り戻すんだ。そう思っていた。

二年生始業式。新しいクラス。新しい担任。もう不登校にはならない。そう誓った。第一回定期考査までは順調だったことだと思う。私は嫌われたり迷惑だと思われたりしたら、また無視されると思い、中々人に頼れない。昨年離任してしまった顧問の先生の手紙には「人に頼ると意外に人から信頼されます。」と書いてあった。つまり、人に頼ることは迷惑をかけることではない。人から信頼されたかったら、まず自分が信頼して、頼らなければならない。少し困難なことだが、やってみようと思う。一つ訂正がある。「頼らなければならない。」ではなくて「頼ってもよい。」だ。無理に頼る必要はなく、緊張した一日もよいが、力を抜くことも大切なのである。

私は「生きる」とは、「頼ること」「無理しないこと」だと思う。人それぞれキャパシティーが違う。他の人と比べる必要はあるのだろうか。自分を信じて自分の道を選択し、他の人にも案内してもらう。意外と楽しくて自分らしい冒険になるだろう。

た。週三回は学校に行って、休んでも友達にノートを見せてもらい、授業にはついていけてた。テスト返却日。恐る恐る点数を見た。決して良いとは言える点数ではなかったが、私なりに頑張っていたので満足のいく点だった。このまま次のテストも頑張ろう。そう思っていたはずだった。六月中旬。また学校に行けなくなった。週二回登校、週一回登校と日に日に登校する日が減っていった。次のテストはどうするか。何度も考えた。気づけばテスト二日前、ほとんど手をつけていない課題。追いつけていない授業。自業自得だ。その日は徹夜して課題をした。何も頭に入らない。なぜ今自分が課題をしているのか。何のために勉強しているか。子供が勉強するのは当たり前。義務教育。そんなことは分かっている。こんなことを考えているのがバカバカしく思えてシャーペンを走らせた。なぜだろう。涙がでてくる。そこで自分の限界を感じた。もうテストなんてどうでもいい。何もかもがどうでもよくなった。それから夏休みまではほとんど学校に行かなかった。唯一、私の楽しみだった部活さえもどうでも良くなってしまった。リアルでの関わりが減り、ネットに依存する日々。今の現状を受け入れず、ネットに逃げていた。ネットは自分の居場所だった。話を聞いてくれる人がいる、共感してくれる人がいる。将来なんて考える余裕はなかった。そんなある日、母から祖父について話を聞いた。祖父は母が中学二年生の時に病気で亡くなっている。ちょうど私と同じ歳だ。母に、「今、お父さんが亡くなったらどうする?」

そんな縁起でもないことを聞かれた。そんなの嫌に決まってる。考えられない。考えたくない。でも母は今の私の年齢の時に父を亡くしている。それがどれだけ辛いことか、私には理解できないほどの悲しみがあったのだろう。それでも母は学校に行っていた。看護師になるという夢を追っていた。どれだけ辛くても母にとって学校に行くことが当たり前だった。

私はこれからどうしたらいいのか。本当にこのままでいいのか考えた。現実を見ずにネットに依存して、将来のことも捨てていた。前に進む努力さえもしていない。周りが協力してくれていても自分は何もしなかった。いつか変わるだろう。前みたいに当たり前の日々が普通に来るだろうと信じていた。でも母の話を聞き、変わろうと思えた。どんな辛い状況でも頑張って夢を叶えた母のように。

当たり前の日々が当たり前でなくなる。周りの日常と自分の日常が変わる日が突然くる。周りと違っても自分のペースで頑張っていきたい。今の現状をしっかり受け止め

優秀賞

ないといけない。母の話を聞いてそう思えた。
私の当たり前の日常が当たり前ではなくなって約半年。少しずつ戻していきたいと思えるようになりました。

「満たされた命」

京都市立中京中学校　二年三組　安田　千桜

「また来てや」
これは、私と曾祖母の最期の幸せな会話だった。
昨年のゴールデンウィークのある夜、私たち家族は翌日に曾祖母の住む奈良の家へ帰る予定だった。曾祖母は病院から退院したばかりで暫く会えておらず、会うのをとても楽しみにしていた。
その時、電話がかかってきた。曾祖母と同居している祖母からだ。
「お母さんが高熱で危険な状態だ。」
ビデオ通話に映し出された曾祖母は確かに苦しそうで、今にもぐたっと動かなくなってしまいそうな気がした。
「頑張ってや、明日行くしな！」
ビデオごしに私たちは必死に励ました。
「頑張るわな。」
と一生懸命言った曾祖母の顔は、今でも思い出すことができる。
私たちの祈りが通じたのか、翌日、奈良の家に着いた時には曾祖母の容態も安定し、ベッドの上から笑顔で迎えてくれた。私たちと話したり、母にさくらんぼを食べさせてもらっているときは本当に幸せそうだった。帰るときには柔らかい笑顔で「また来てや」「うん」という会話を交わした。
しかし、私たちが帰った日の夕方から、曾祖母は意識不明の状態がずっと続いた。今思えば、曾祖母は私たちに会いたいという強い思いを叶えるために残った全ての力を使い果たしたのだと思う。その後再度入院したが、新型コロナウイルスの影響で同居の家族ですら滅多に会えない中、私たちも会えない時間が続いた。
夏に転院するときには、京都に住む私たちは、生きて会うのは最後になるだろうと覚悟して行った。患者を輸送するベッドに乗って運ばれる曾祖母はいつもと同じような穏やかな顔で眠っていた。それでももう会えないのか、という寂しさは澱となって私の中に積もっていった。実際に曾祖母と次に対面できたのは冬。亡くなり、家に帰って来た時になった。
『運動・呼吸や活動を続けて、この世にある。命を保つ。』辞書による「生きる」の意味だ。
曾祖母がまだ話せた時、よく言っていた。
「死ぬのは怖ないわ。人に迷惑かけたないし、延命治療もいらんしな。」
私はずっと疑問だった。私は死ぬのが怖い。痛そうで悲しそうだ。年をとれば死は怖くなくなるのだろうか。いや、私の考えは間違っていた。年をとるから死という未知の出来事への恐怖心が消え去るわけではなく、大切なものと得る幸せに十分に満足するから死を受け入れられるのだと気づいた。曾祖母にとっては、独りで過ごした長い入院生活よりも、皆で過ごしたゴールデンウィークのあたたかなあの数時間こそが「生きている」と強く感じたときだったのだろう。
「生きる」とはただ心臓が動いているということだけを指すわけではない。人と人が関わり合い、たくさんの経験を得ることが「生きる」ということだと思う。
昨年の年末に曾祖母が亡くなり八ケ月。日常の中で折にふれて曾祖母を感じることがある。今年も実ったさくらんぼの赤さに、収穫した野菜で作る曾祖母直伝の料理の味に。
私は再び奈良へ行く。
御りんと木魚を叩いて、仏壇の前で伝える。
「また来たよ」

「『津波てんでんこ』から学ぶ命の守り方」

奈良市立富雄南中学校　三年五組　黒田　奈菜

朝から激しい雨が降り続いている中、私は新体操の遠征試合で愛媛県松山市の体育館に来ていました。時間が経つごとに雨の勢いが増し、閉め切った体育館にも響くぐらいまでひどくなっていました。
その時、体育館のあちこちから一斉に大きなチャイム音

優秀賞

が鳴りました。

「チャラララン♪チャラララン♪」

各自が持つ携帯電話からの緊急アラームの音でした。みんなが自分の携帯電話で災害危険情報を受けていたのです。それほどまでにひどいのだろうか、このあたりは近くに川や海などあったかな…。私は見知らぬ土地で不安に襲われました。

幸い、その後雨は徐々に止み、避難の必要もなく、試合は無事に終了したのですが、もし状況が悪化して土砂災害や津波の被害が出てしまっていたら、私は避難する行動を取れなかったと思います。

その時に思い出したのが、十一年前の東日本大震災の回想をしていたドキュメンタリーです。何度見ても本当に起こったことかと疑うような激しい揺れと街を襲う津波。その中で私と同じように突然の災害にどう行動するべきか悩む人が映っていました。

大きくて長い地震が起き、揺れが収まったとき、

「もう大丈夫だ。」

と過信する人と、

「津波が来るかもしれない、高台に避難しよう。」

と周りの人に呼びかける人がいました。

ある町の人々は、声掛けのおかげもあって、町の多くの人が高台に避難できたそうです。しかし、ここの高さでは安心できないと更に上へ上へと登っていきました。そのおかげで多くの人々の命が救われたそうです。

人はなにか起こったとき、今までの経験から答えを出そうとします。

「今まで何もなかったから。」

「ここが避難場所だから。」

「ここまで来たら大丈夫。」

その考えがあっているか間違っているかは後からしかわかりません。そんなとき、判断するのは自分しかいません。目の前で起きていることに対して責任を持つのは自分、自分の身を守るのは自分しかいない、ということです。

ニュースで印象に残った言葉に「津波てんでんこ」という言葉があります。「津波てんでんこ」とは、津波被害が多い三陸地方で、

「津波が起きたら命てんでんこだ。」

と伝えられてきた言葉です。これは、

「津波が起きたら家族が一緒にいなくても気にせず、てんでばらばらに高所に逃げ、まずは自分の命を守れ。」

という意味です。それを覚えていたある学校の生徒が地震が起きたとき、先生の指示よりも先に津波が来るから危険だと判断し、各々が自分の判断で高台へと走っていったそうです。

このことを知ってから私は、学校で行う避難訓練に真剣に取り組んだり、避難するにあたっての正しい知識を得たりすることはもちろん、次に自分の身に未曾有の災害が起きたとき、自らの責任で私はてんでんこに避難をすることができるよう、意識を持っていようと思いました。誰の責任でもなく、自らの判断で。それを日常的にできる大人になりたいと思います。

この夏も、各地で豪雨が続いています。過去の災害に学び、備え、日々の暮らしを守るため、尊い命を守るため、私たちは考え続けなければならないと思いました。

「長く生きることが幸せ？」

門真市立門真はすはな中学校　三年一組　中島　そら

「おじいちゃんが、病気かもしれへん。」

ある日の晩に、お父さんがそう言った。しかし、その時点でまだ詳しいことはわかっていなかったらしく、私は勝手に、「治療をすれば治るだろう、そんな重い病気じゃないはず。」と思っていた。それから数日が経ち、やはり、治療をすれば治る病気だったようで、手術をすることになった。しかし、腫瘍が難しい位置にあるため、難しい手術になるとのことだった。考えないほうがいい、とわかっていても、手術が失敗してしまったときのことを想像してしまい、とても不安だった。

数日が経ち、そろそろ手術も近づいてきた頃、おじいちゃんの容態が急変した。誤嚥性肺炎を発症したらしい。自発呼吸ができなくなり、人工呼吸器をつけることになった。腫瘍も肺にあったため、おじいちゃんの肺はかなり弱っていた。おばあちゃんは、

「人工呼吸器を外したあと、自発呼吸をするのかどうかわかりません。」

とお医者さんに説明されたと電話口で言っていた。それを

優秀賞

聞いた私は、さらにおじいちゃんのことが心配になった。

それからまた数日が経ち、お盆の前にみんなで墓参りに行くことになった。そのタイミングで、おじいちゃんの病気について話す予定だった。

墓参りに行く日、私たち家族は、離れて暮らすおばあちゃんたちよりも先にお墓に着いた。供える花を売店で買い、お墓周りの雑草を抜いたり、お墓を磨いたりして、おばあちゃんたちが来るのを待っていた。しばらくするとおばあちゃんたちがやってきて、みんなで順番に、お墓の前で手を合わせた。

そのあと、霊園の休憩所で、大人たちがおじいちゃんの病気について話し始めた。私や弟は、静かに話を聞いていた。そこで話し合われたのは延命治療についてだ。人工呼吸器を外して自発呼吸をしなかったときのための話し合いだった。大人たちはみんな、延命治療をしないという考えだった。私は、その話し合いの中で、お父さんが、

「延命治療をして、好きな酒やたばこを我慢してまで、生きようとは思わへんやろ。」

と言っていたことが、とても印象に残っている。自分のお父さんなら、長く生きてほしいと思うはずなのに、おじいちゃんの気持ちをちゃんと考えた上で決断したのだ。この言葉からは、冷たさより温かさが感じられた。最終的に話し合いは、延命治療をしないという考えでまとまった。

帰りの車内で、お父さんとお母さんがさっきの話し合いについて話し始めた。その話の中でお母さんが、

「延命せんでいいよ。先に言っとくわ。」

と私と弟に言った。すると、お父さんも、

「俺も、せんでいいで。」

と言ったのだ。私はとりあえず頷いたが、正直、心の中は複雑だった。実際にその状況になったら、長く生きてほしいという気持ちが勝ってしまうのではないかと思ったのだ。だが、本人の意思を聞いている以上、それを尊重してあげるべきだと感じた。それに、私や弟が延命治療のことで悩むことがないように、意思を伝えてくれたのだから、しっかり受けとめ、二人の優しさに感謝すべきだと思った。

私は、この墓参りの日をきっかけに、長く生きることは幸せなのかを考えるようになった。世の中には九十歳や百歳を過ぎても元気に生きている人がいて、私もできるなら長生きしてみたいなと思う。でも、生きるなら楽しく生きたい。だから、私も両親と同じように、好きなことを我慢するぐらいなら、延命治療は受けたくない。しかし、延命治療が悪いものだとは思わない。本人が望むなら、受ければいい、それだけの話だ。延命治療はあくまで、人生における一つの選択肢にすぎない。それを選ぶかどうかは、その人や家族の意思で決まる。どう生きるかは、それぞれが決められる自由なのだ。

「いのちのカウントダウン」

京都市立北野中学校　三年三組　仲　水蓮

「店のお客さんが猫を拾わはって困ってるらしいで。」小学二年生の秋に母が何気なく話した一言で、私は猫を飼ってみたいな、とぼんやり考えた。当時、犬よりも猫のほうが好きだった私は、母に「どうしても飼いたい、私がお世話をするから。」と懇願した夜をよく覚えている。母は私に本当に飼い主になる覚悟があるのか何度も確認した。それでも折れずに頼み続けた私を信じ、拾った人に一匹の男の子を引き取ると連絡してくれた。それに続くように、もう一匹の女の子も引き取り手が見つかった。家に猫がやってくる。この時家族が増えた感覚と目に見えて願いが叶ったせいか、ふわふわと夢見心地だった。いよいよ、小学二年生の掌に乗るくらい小さな黒猫がうちに来た。透き通った水色の瞳が怯えるようにこちらを見ていた。腕に抱くと逃げようと私の胸を押しのける小さな肉球、猫用のミルクを口の周りにつけながら飲む姿。すべてが愛おしくて愛おしくて、初めて会った日から私はこの小さなぬくもりが大好きになった。

「もう一匹の子、はやとの弟かもしれへんって。」私の意識が変わったのは、またしても母の言葉だった。新しい家族に「はやと」という名前がついて何週間か経った後だった。もう一匹の子、というのはいつまでも引き取り手のつかない男の子だった。写真を見せてもらうと、三匹の中で一番小さいからだを縮こませている毛玉。保護した方は既に成猫を飼っていて、このまま引き取られなかったら安楽死されてしまうと聞かされた。

優秀賞

動物愛護に関する知識がなかった私は、小学校の図書館で犬や猫の殺処分に関する本を集め五冊ほどに目を通した。それらの本にはノンフィクションと記されていた。信じることができなかった。丁寧に写真や殺処分の工程がのっている本もあった。動物は息を吸わないと苦しんで、酸素がなくなれば死んでしまう。それを知りながら狭い箱にたくさんの犬や猫を追い込んで二酸化炭素を入れる。下から充満していき、背の小さないのちから順に。背の大きないのちは最後まで首を伸ばして抗う。その後、いのちだった者たちは灰になる。現実味を帯びだすいのちのカウントダウン。私は怖くなった。もし私が猫を飼いたいと思わなかったら、はやとは今。もしあの子猫に家族ができなかったら。そんな事も知らずに今日を生きるいのちがある。その晩泣きながら母に頼み込んだ。刻一刻と迫る命の期限から救いたかったのだ。

数日後、新しい家族が増えていた。初めこそ喧嘩ばかりしていた兄弟も寄り添って眠るようになった。その時私は、「いのちのカウントダウン」を止めた感覚がした。しかし、これは犬や猫に限る話なのだろうか。

この世界にはたった一つのきっかけで失われるいのちがどれだけあるだろう。当時の私は目の前のいのちに精一杯だったが、中学三年になった今、存在するすべてのいのちに視野を広げることができた。現代では銃弾一つばかりか言葉一つで、簡単に人のいのちを奪うことができる。ガラスのコップよりも脆く、ティッシュペーパー一枚よりも破れやすい。でも、いのちにはしぶとく生きる根性があり、他人のいのちを私が守ることもできる。私にとってのいのち。それは、身勝手に定められた「いのちのカウントダウン」を見つけることからはじめるものだ。

「インターネットといのち」

長浜市立びわ中学校　三年二組　中村　倖

インターネットは、その画面の向こうのいのちの存在を薄く感じさせることがある。匿名性という安心感、そして「まわりもやっている」という責任の薄れによって誹謗中傷は絶えず、傷ついている人は数えきれないほどだ。

インターネットは便利だが、使い方次第で見せる顔を変える。そのことを私たちに再認識させたのは二〇二〇年、当時二十二歳だった女子プロレスラーの木村花さんが、SNS上での中傷によって自殺した問題だろう。花さんがリアリティ番組でとった行動に対する批判コメント。それらはすぐに誹謗中傷へと変わり、その数は数百件にもなったという。

私がこのニュースを知って真っ先に浮かんだのは、「言葉のナイフ」という比喩だった。コメントを書き込んだ人にとってみればなんてことはなく、ただいつもの様に気持ちを吐露していただけだったのかもしれない。しかし、それらはすべて鋭い凶器となって花さんの心を抉り、ついにはその尊いいのちを奪ってしまった。

恐ろしかった。暴力など使わずとも、簡単に人のいのちが傷つくことはある。そのことをまざまざと見せつけられたようだった。インターネットを通して私たちに喜びや感動を与えてくれる人たちがいる一方で、匿名の隠れ蓑を悪用して心無い言動をする人がいる、その事実がショックだった。

一方、そのような誹謗中傷からいのちを守る動きもある。花さんの母親である木村響子さんらの努力により、「侮辱罪」厳罰化の改正刑法が国会で成立したのだ。これは私たちにとって大切な一歩ではないかと思う。意見である「批判」と、他人の名誉を傷つける「誹謗中傷」の区別は曖昧だが、これによってインターネットで苦しい思いをする人が少なくなることを願いたい。

また、響子さんは「SNSを悪者にしていたら何も変わらないと思います。どう思うかの問題で、本当に使う人の心を映す鏡のようなものだと思っています。」と仰っている。昨今、インターネットやSNS上でのトラブルが増えているのは事実だが、結局のところそのトラブルを起こしているのはすべて人間なのだ。私たちがすべきは、相手が自分に対して見せている部分以外を勝手に想像し、決めつけることではない。「自分が知っている相手は、その人のすべてではない」という意識を持つことだ。これはインター

優秀賞

ネットでの場合にのみ言えることではないと思う。

　ＳＮＳやインターネットがもたらすのは、悲劇だけではない。今やたくさんの人とつながり、考えを深め、広げることができる。ならば私は、誹謗中傷によっていのちを傷つけるためにではなく、そのいのちを輝かせるためにインターネットを使いたい。

入選

●滋賀県

「うまれたときのしゃしん」
甲賀市立貴生川小学校　一年　田中　景大

「コオロギのしあわせ」
野洲市立野洲小学校　二年　田中　壱弦

「ぼく明日もがんばるよ」
草津市立老上西小学校　三年　河内　僚我

「18さいでささげたいのち」
彦根市立河瀬小学校　三年　木村　來夢

「命の大切さ」
野洲市立祇王小学校　四年　山﨑　心実

「尊い命」
大津市立田上中学校　一年　浅田　遥

「なぞ」
大津市立仰木中学校　一年　安達　桜咲

「私達のやるべき事」
大津市立仰木中学校　一年　長谷川　小梅

「いのち」
大津市立仰木中学校　二年　森　はな

「いのちの大切さ」
大津市立打出中学校　一年　新井　洵乃介

「生きる」
大津市立打出中学校　一年　深尾　結菜

「私の誕生日」
彦根市立鳥居本中学校　一年　土田　瑚珀

「生きること、死ぬこと、そしていのち」
私立近江兄弟社中学校　一年　箕浦　摘記

「あたり前のありがたさ」
私立近江兄弟社中学校　二年　山脇　結菜

「植物の命に触れたとき」
大津市立日吉中学校　二年　小川　かほる

「みんな同じ命」
彦根市立中央中学校　二年　堀江　夏妃

「おじいちゃんと私」
彦根市立南中学校　三年　山下　由莉

●京都府

「たべもののいのち」
京都教育大学附属京都小中学校　一年　盛田　瑞希

「その時その時を大切に」
京都教育大学附属京都小中学校　三年　古株　陽茉莉

「わたしの心ぞう」
長岡京市立長法寺小学校　二年　中出　瑠美

「二平方メートルの世界でを読んで」
木津川市立城山台小学校　四年　森本　琉奈

「人生の本」
京都市立旭丘中学校　一年　藤井　愛莉

「生きる」
京都市立西京高等学校附属中学校　一年　渡邊　あい

「いのち」
京都市立開晴小中学校　八年　小笹　孔莉

「母の言葉」
京都市立開晴小中学校　九年　早川　聡美

「『いじめ』と『希望』」
私立立命館宇治中学校　三年　上田　幸華

入選

「尊いだけじゃないのが命だ」
綾部市立豊里中学校　三年　大島　歩未

●大阪府

「おばあ長生き大作せん」
大阪市立真田山小学校　二年　河村　寛太

「駅から広がる命の世界」
大阪市立西九条小学校　四年　島村　幸典

「命はみんなの大切なもの」
富田林市立富田林小学校　四年　田守　梨華

「生きるために食べる命」
大阪市立大淀小学校　五年　田中　道啓

「命って何のためにあるんだろう」
島本町立第一小学校　五年　田村　優奈

「自然とともに生きる」
大阪市立北田辺小学校　六年　音野　アリシア桜

「私にとっての命」
私立上宮学園中学校　二年　坂巻　優月

「命を育む」
大阪市立都島中学校　三年　小畑　春翔

「だから私は対話する」
大阪市立都島中学校　三年　中山　涼琴

●兵庫県

「つながるいのち。けんけつでれんけつ。」
姫路市立別所小学校　一年　松本　大知

「大せつないのちでつよく生きたいな」
姫路市立安室小学校　二年　松尾　奈々帆

「わたしのお兄ちゃん」
姫路市立安室小学校　三年　森口　璃乙

「命の大切さ」
私立神戸海星女子学院小学校　四年　齋藤　愛果

「大人のけんか」
加古川市立平岡小学校　五年　網盛　希乃花

「誕生した新しい命」
姫路市立香呂小学校　五年　高田　結奈

「いのち」
兵庫教育大学附属小学校　五年　徳岡　冴汰朗

「笑顔のお好み焼き」
私立甲南小学校　六年　井野上　碧泉

「命をもらって生きるということ」
福崎町立福崎小学校　六年　隅田　悠太

「いのちの支え合い」
姫路市立船場小学校　六年　吉田　更紗

「命の大切さ」
播磨町立播磨南中学校　一年　告野　由宇

「大切な言葉」
姫路市立山陽中学校　一年　中野　早都

「いま、ここに生きている」
私立関西学院中学部　一年　和田　いおり

「一つのいのち」
私立関西学院中学部　二年　荒井　祐香

「祖母といのち」
私立関西学院中学部　二年　八木　優貴

「救急救命士講習を受けて」
神戸市立有野中学校　二年　山口　拓海

入選

「感情」
私立須磨学園夙川中学校　三年　工藤　優華

「救えるいのち」
尼崎市立小園中学校　三年　原　舞汎

「『いのち』の証」
尼崎市立小園中学校　三年　山岡　奏心

「命を考える」
尼崎市立小園中学校　三年　米山　穂香

●奈良県

「いのち」
生駒市立生駒台小学校　三年　橋本　成美

「弟が生まれた日」
奈良市立興東小学校　五年　奥田　倖成

「あしたも野球がんばろう」
高野町立高野山小学校　三年　加勢田　悠生

「命は一つ」
和歌山市立岡崎小学校　六年　遠矢　真大

「一日、一日を大切に」
上富田町立上富田中学校　二年　尾﨑　友咲

「『命』からのメッセージ」
和歌山県立きのかわ支援学校　三年　大久保　颯人

「僕の弟」
和歌山大学教育学部附属中学校　三年　佐々木　健人

「五文字の重み」
岩出市立岩出中学校　三年　巽　由奈

「あたりまえの一日」
香芝市立香芝西中学校　二年　角谷　美桜

「命の大切さとこれからの決意」
香芝市立香芝東中学校　二年　田路　梨心

「笑顔の仮面の裏」
奈良市立富雄南中学校　三年　岩田　紗季

「僕と猫」
奈良市立富雄南中学校　三年　天雲　悠斗

●和歌山県

「命について」
私立智辯学園和歌山小学校　三年　佐久間　董

「命をふきこむこと」
私立智辯学園和歌山小学校　三年　前田　結衣

選考を終えて

なかなか出口が見えない新型コロナ禍に世界中が翻弄されるなか、２０２２年はロシアがウクライナに軍事侵攻した「戦争の年」にもなってしまいました。

病気と戦争――。

否応なしに、いのちについて考えざるをえない日々が続きます。

自然災害や大事故、理不尽な犯罪の数々も、あいかわらず社会に暗い影を落とし、いのちを支える日常は揺らぎどおしでした。

そんな状況のもとで開催された２０２２年度のコンクールです。いまだから打ち明けると、「世の中の重苦しい空気を反映して、今年は暗い内容の作文がたくさん寄せられるかもしれない」という予感もしていました。

ところが、それはうれしい誤算になりました。厳正な予備選考を通過した30編の作文には、むしろ「いのちの輝き」があふれていたのです。

自分自身をも含む大切な家族のいのちを描いた作文、身近な生きもののいのちを描いた作文、遠い街や遠い時代のいのちに思いを馳せた作文……どれもよかったなあ。

個々の作文の魅力は、どうか、この冊子を読んで感じ取ってください。重苦しい時代でも――いや、そういう時代だからこそ、若い世代は、いのちの小さな輝きを敏感に探し出してくれる。それがうれしい。頼もしい。いのちをめぐる30編の作文は、明日へつながる希望の物語でもあったのです。

ある作文の中に、印象深い一節が綴られていました。いのちについてお母さんやお姉さんに質問を繰り返す「僕」に、家族はあきれながらもしっかりと付き合ってくれます。

〈家族で電子機器から離れてそんな話をする時間が僕は、密かに好きだったりします〉

小学生も中学生も、まさに育ち盛り。「体のいのち」を育ててくれるのが美味しいごはんなら、「心のいのち」を育ててくれるのは家族や友だちとの語らいかもしれません。

まずは、この冊子に収められた作文を読んだ感想を語り合うことから、さっそく……いかがでしょう。

選考委員会　委員長　重松　清

選考委員長　重松 清
選考副委員長　菊池 省三
選考委員　坂下 裕子
選考委員　丸川 征四郎

表紙・カットイラスト　永田 萠

2022年度　小・中学生

「いのち」の 作文 コンクール 作品集

2023（令和5）年1月発行

編集・発行　公益財団法人 JR西日本あんしん社会財団
〒530-8341　大阪市北区芝田二丁目4番24号